

竺法護譯『正法華經』における翻譯の方法

— 第三章「譬喩品」を中心として

ジャン=ノエル A. ロベール
(フランス国立高等研究院)

辛嶋静志氏の、特に『正法華經詞典』(1998年)として結實した竺法護譯に関する先驅的研究のおかげで、『正法華經』の内的一貫性と様式を主眼とする研究が非常に容易になった。

この早期の譯は、五世紀初頭の鳩摩羅什譯に取って代わられた時以降、ずっと悪名を被ってきた。とりわけ竺法護譯に不明瞭な點やほとんど理解不能な點があることは、『法華經』を中心とする宗教的諸學派の内で何度も取りざたされてきたのであり、それ故、鳩摩羅什がいかに多く、そして明瞭に竺法護の語彙を借用しているかはごく表面的に比較しただけでもはっきり判るにもかかわらず、竺法護譯が注釋史の傳統にほとんど何の影響の跡も残していないのは確かに故なきことではない。

私は最近、漢語で書かれたテキストであるという觀點から読みやすさに十分留意しながら、第三章「譬喩品」 — これはもちろん廣く認知された章名であって、竺法護譯では「應時〔時宜にかなった〕品」という — を體系的にフランス語譯することをを行った。そこから得られる當面の結論をいくつか示したい。

サンスクリット語原典の寫本や口頭傳承がどうであったかという單純な問題をとり越えて、竺法護が最終的に作り上げた譯本というのは、原語に関するかなり直觀的な知識と、通讀可能な漢語文獻にしようとする配慮と、原典に関する先天的で、たぶん口承的な知識に隨順する必要性 — それは法護の直接的でしばしば間違った原典理解と對立するものであった — との間の緊張關係の産物であるように思われる。翻譯としてあまり信用できないことはさておき、驚くべきことにしばしば竺法護譯は興味深い讀みを示すことがあり、それ故、全譯を試みる價值があるのである。

テキストの具體例に即してこれらの諸點を検證したいと思う。

Jean-Noël A. ROBERT ジャン=ノエル A. ロベール
1949年生
フランス国立高等研究院 (EPHE: École Pratique des
Hautes Études) 教授 文學博士 (パリ第七大學)
主要著作 *Les doctrines de l'école japonaise Tendai au début du
IXe siècle : Gisbin et le Hokke-shû gi shû* 『心の「寺」を觀る
— フランス人學者が語る佛教の魅力』 *Le Sûtra du Lotus*
ほか多数